

中期取組目標実現に向けた「三つのプラン」

学校教育目標

○深く考え 協働しながら 学び続ける 力を育みます。(知)(公)
 ○自分を大切にし 相手を思いやる 心を育みます。(徳)
 ○夢に向かって たくましく チャレンジする 姿勢を育みます。(体)(開)
 ~子どもたち一人ひとりが持続可能な社会の創り手となることをめざして~

教育課程全体で
育成を目指す資質・能力

〈言語能力〉
 〈自分づくり〉
 〈問題発見解決能力〉

具体化した資質・能力

感じたことを言葉にする力 伝え合うことで自分の考えを深化させる力
 他者を理解する態度・自己を理解する姿勢
 好奇心 問題を発見する力 試行錯誤する能力

中期取組目標

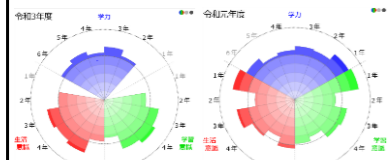
○他者と協働しながら、コミュニケーション能力を伸ばすとともに課題を解決する力を高めます。
 ・1年目は、伝え合いを通して自分の考えを深めることのできる授業づくりを推進します。
 ・2年目は、筋道を立て深く考えたことを正確に伝え合うコミュニケーション能力を伸ばす学習場面を増やします。
 ・3年目は、考えや思いを共有し協働しながら課題を解決する力を伸ばす活動を進めます。
 ○豊かな体験を通して、基本的自尊感情を醸成するとともに、夢や持続可能な社会の実現に向け努力する姿勢を育みます。
 ・3年間を通して、共感体験をさまざまな場面で設けるとともに、SDGsを意識した教育活動を推進します。

学力向上アクションプラン

重点取組分野	具体的取組
授業改善	①一時間で育成を目指す資質・能力を明確にした授業作りをする。めあての共有や、ふりかえりの時間を大切に、児童が主体的に学習を進められるようにする。②重点研究テーマを「伝え合いを通して、自分の学びを深めることができる子供の育成」とし、国語を中心に、児童が深く考え協働しながら学び続ける力を育成する。
担当	教育内容推進部

学力向上に関わる本校の状況

(1)学力に関わる児童の実態
 全体的に、学力は横浜市の平均を若干上回っている。しかし、学習意識、生活意識は低い学年もある。学習が好きという割合は、どの教科においても上昇傾向にあるが、学年によっては好きと答えた割合が減少している。高学年になると学習内容が分かりにくいという児童の割合や、自分の考えを発表していないという児童の割合が増えている。生活意識の低さも見られ、生活・学習意識が連動していることがわかる。また、教科ごとの学習の大切さを感じていない児童もいるため、学習内容を定着させるだけでなく、学習内容がどう生活と結びついているのか、生活の中で生かせるような授業改善をしていくことが求められる。経年変化で見ると授業が分かると感じている児童の割合は、上昇傾向にある。



※令和2年度はデータなし
 (2)これまでの学校の取組状況
 基礎的・基本的な知識・技能の確実な習得を図るとともに、発展的な内容についても適宜扱い、個に応じた指導を心がけてきた。また、子どもが学習の主体となるよう、課題解決型の授業設計を行ってきた。さらに、主体的・対話的で深い学びの実現をめざし、授業の中で伝え合いを通して、自分の学びを深めることのできる場を位置づけてきた。その結果、話したり、聞いたりして、人とかがわかることが好きと感じている児童の割合が、ここ数年で上昇している。

今年度の目標

○児童一人ひとりが、伝え合いを通して自分の考えを深めることのできる授業づくりを推進することにより、コミュニケーション能力を伸ばすとともに、他者と協働しながら課題を解決する力を高める。

目標を実現するための具体的行動プラン

上半期
 ○子どもが思いや考えを伝え合ったり、議論したりする場を授業の中において適切に位置づける。
 ○既習の内容を発展させて解決できるような学習課題を設定する。
 ○実社会や実生活との関わりを重視した学習課題を設定する。
 ○学習の見通しをもったり、振り返ったりできるような場を計画的に位置づける。
 ○国語の各単元において育てたい資質・能力を育成するための言語活動を設定する。

下半期
 (上半期の内容に加えて)
 ○本時のねらいや活動に合った学習形態を適切に設定し、視点を明確にして話し合うことで、協働的に課題解決ができるようにする。

豊かな心の育成推進プラン

重点取組分野	具体的取組
人権教育	①ペア学年との活動を毎月行い、異学年交流の機会を設けることで、相手を思いやる力やそれを行動に移す力を養う。②YPアセスメントの分布図に応じて、横浜プログラムの中から活動を選んで取り組み、子どもたちの自尊感情を育む。③児童理解研修や職員の人権感覚を高める研修をいろいろな観点から計画・実施する。
担当	児童支援部(人権福祉教育)

豊かな心に関わる本校の状況

(1)豊かな心に関わる児童の実態
 ・市学力・学習状況調査のアンケート結果から、学校が安心できる場所、またはどちらかといえば安心できる場所と感じていると9割の児童が答えている。
 ・あいさつが自分からできると答えた児童が市平均よりも下回っている。
 ・自分を好きだと感じていたり、自分にはよいところがあると思っていたりする児童は市の平均またはそれ以上だが、学習に向かう態度や生活意識が低い学年はこの項目についても低くなる傾向がある。
 ・約束やきまりを守ることをほとんどの児童が大切だと感じている。
 ・どんなことがあってもいじめはいけないことだと感じている児童がほとんどである。
 (2)これまでの学校の取組状況
 ・誰もが安心して豊かな学校生活を送ることができるように、児童へのアンケートや聞き取り、面接を行った。
 ・職員全体でルールやマナーについての共通理解を行った。
 ・年2回のYPアセスメントを行い、児童の変化を見取るようにした。

今年度の目標

○横浜プログラムを学級の実態に応じて活用し、児童の自己肯定感につながるようにする。

目標を実現するための具体的行動プラン

上半期
 ○年間指導計画を活用し、学校行事や各教科等、豊かな体験との関連を図った道徳科の指導を行うようにする。
 ○異学年児童同士が交流する活動を通して、集団の中で役割意識を育むようにする。
 ○子どもの社会的スキル横浜プログラムを教育課程に位置づけ、子どもの自尊感情、コミュニケーション力、意思決定や問題解決能力の向上を図る。

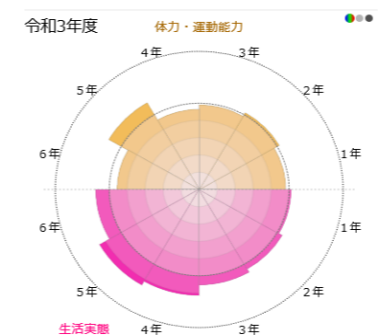
下半期
 (上半期の内容に加えて)
 ○子どもの自尊感情を育てるために、「わかった」「できた」を感じられ、安心して自分を表現できる授業づくりに取り組む。

健やかな体の育成プラン

重点取組分野	具体的取組
健康教育	①かけ足・持久走の記録会に向けて、主体的に運動に取り組もうとする子を育てる。②かけ足を通じて、運動との豊かな関わり方を知り、生涯にわたって運動に関わろうとする子を育てる。③栄養教諭のリーダーシップのもと、各担任がそれぞれの学級において、食育を推進する。
担当	健康安全部

健やかな体に関わる本校の状況

(1)体育・健康に関する実態
 ・市平均と比べ、朝食を食べている児童数が多く、市の平均を超える結果となった。また、睡眠時間も8時間以上とれている児童が多い。食育や健康教育の指導の効果が表れている。
 ・運動時間は市の平均を大きく下回ってしまっている。運動時間が年々、減少傾向にある。
 ・地域のスポーツクラブへの加入者は多い。
 ・体力テストの結果、市の平均を下回る項目が多く、運動に親しめていない児童が多い。
 (2)体力の概要と要因の分析
 ・新体力テストの結果を見ると、ほとんどの項目が市の平均を下回っている。なかでも、「反復横飛び」「シャトルラン」「握力」の3項目が低い。コロナ禍の状況の中で、運動の時間の確保や十分に体を動かすことのできる環境がないことが原因と考えられる。



今年度の目標

○休み時間に校庭で遊ぶ児童の数を増やし、スポーツを通してのコミュニケーションの促進を図る。

目標を実現するための具体的行動プラン

上半期
 ○学習カードや場の設定などを工夫し、身に付けさせたい資質・能力を明確にし、単元づくりをしていく。そのために、教師の実技研修を充実させるなど、各学年の接続(系統性)を意識した指導ができるようにしていく必要がある。また、発達段階に合わせた学習カードなどが共有できるように、ブロックで使用しているカードなどを互いに見合うようにしていく。
 ○家庭科では、食育との関連を図り、栄養バランスのとれた食事の大切さを学習する。また、栄養バランスを考えて調理実習を行う。(情勢によっては計画までとし、調理は中止。)

下半期
 (上半期の内容に加えて)
 ○自己の体力の向上を知り、より高めるためにはどのような学び方や、生活の仕方が適切かを考えられるように指導していく。